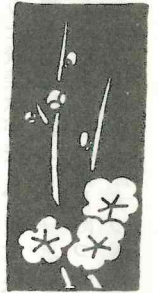


仙台司教区 教区事務所だより



迎春

(第 39 号)
昭和56年1月1日

一九八一年を迎えるにあたって

北仙台教会 文園 章光

わたしたちは今、一九八一年を迎える。日本のカトリック信者にとって、この年は、永久に記念すべき年となるであろう。なぜなら、ローマからはるばる教皇様をこの日本に迎える、という光栄ある年になるはずであるから。そればかりでなく、仙台教区にとっていろいろ記念すべき年である。年頭に当たり回顧してみても、将来の目標をきめるため、むだではなからう。

第一に、本年は仙台教区の創立90年にあたる。すなわち一八九一(明・24)年4月17日、日本北緯代牧区のうち、宮城・福島・岩手・青森・秋田・山形・新潟の7県と北海道を管轄区域とする函館教区が生まれたのである。パリ外国宣教会に委託され、ベルリオーズ神父が7月25日東京・浅草教会で司教に祝聖された。一九二一(明・45)年新潟教区が新設され、新潟・山形・秋田の3県を神言会に委譲し、さらに一九一五(大・4)年、札幌教区が

新設されたので、函館地区を除いて北海道をフランススコ会に委譲した。50年前の一九三一(昭・6)年には、司教区はカナダ・ドミニコ会に委ねられ、デ・マス師が教区長となった。一九三六(昭・11)年3月、ルミュー師が司教に任命され、ローマ聖庁の許可を得て司教座を函館から仙台に移し、仙台教区と改称した。(同年6月元寺小路聖堂で司教に祝聖された。)すなわち本年は教区創設90年、改称45年の記念すべき年である。

函館教区の創設は同時に日本の教階制度の確立となった。北緯代牧区、南緯代牧区、中緯代牧区はそれぞれ司教区に昇格し、東京に首都大司教座がおかれ、長崎・大阪・函館に属司教座がおかれた。これはカトリック国のみ行われるもので、当時まだ布教国であった日本では異例のことで、教皇庁が特に日本を重視されたものといわれている。目を転じて司祭の叙階についてみよう。

仙台出身の最初の司祭(日本人最初の司教)早坂久之助師がローマで司祭に叙階されたのは、70年前の一九一一年(明・44)年6月10日である。後の東京大司教・土井辰雄枢機卿が元寺小路聖堂で司祭に叙階されたのは60年前の一九二一年(大・10)年10月29日である。なお、浦川和三郎司教は75年前の一九〇六(明・39)年7月1日長崎で司祭に叙階され、40年前の一九四一(昭・16)年、ルミュー司教と交代した。

現在の神父様方をみると、古川の川井啓神父が6月10日、元寺の土井文雄神父が12月20日、塩釜の鷹鷲達衛神父が12月22日、それぞれ叙階25周年(銀祝)を迎えられる。

一関の小野忠亮神父が2月16日、西仙台の深沢守三神父と塩町の児山六七男神父が6月1日、叙階40周年を迎えられる。

司教様の日程



- 1月1日 元旦ミサ 元寺小路司教座聖堂
- 1月7日 聖ライムンド(司教修道名祝日)
- 11日 司教修道名祝賀、新年会共祝(元寺小路教会)
- 16日 スペルマン病院理事会
- 19日 カテドラル再建企画委員会
- 20・21日 東京大神学校常任委員会
- 26日 社会福祉法人理事会
- 27日 教区司祭団月例会
- 聖パウロ女子修道会ミサ

ラ・サール会

創立三百年記念式



ラ・サール会は12月2日、在仙の司祭、シスター方約25名を招いて、修道会創立三百年を祝った。

ラ・サール会は、創立者聖ヨハネ・バプチスタ・ド・ラ・サールが、一六八〇年6月、自分のもとに集まった教師達を自宅に呼び共同生活を共にしはじめた時に誕生した。(教皇の正式認可は一七二五年)発足当時は十数名の会員であったが、現在は、世界各国に約一五〇〇の修院と、一万二千名の会員を有している。

記念のミサは佐藤司教様によってささげられたが、司教様は説教で、「神は必要なことはなさるが必要でないことはなさらない。ラ・サール会の創立も神のご計画の中で必要であったからである」と説かれ、聖職者の中にラ・サールの学校の出身者が多いことを指摘、今後の会の発展と活動への期待を述べられた。

福島県

カトリック青年リーダー研修会



一般に、教会内の青年はまとまりと行動性に乏しい、といわれる。しかし福島県の青年の間では、数年前から、この事に真剣に取り組んでいる人達があり、一昨年の郡山の集い、昨夏の五浦(勿来)の集いなどを実施してきた。これらを土台として、この度標記研修会

が福島・桜の聖母短大を会場として11月22日から24日まで行われた。県内各地から43名の参加者を得て、充実した集いとなった。

最初にビシエ神父様から励ましの言葉をいただき、開会。フランススコ会のブラザー末吉の歌の指導、スライド、青年活動の在り方についての話し合い、「ボランティア活動について」佐々木信夫氏が、「あなたは、イエス・キリストの証し人として何ができるか」をSr今泉(桜の聖母短大議長)がそれぞれ問題提起をし、更にそれに基づいて話し合いを深めた。

2日間の研修会の間、夜を徹して話し合うグループもあり、炊事、宿泊等も、すべて参加者によって行われ、仲間意識を深めることができたのは、大きな収穫であった。この研修会には、教区一粒会と県信徒連絡協議会から経済的援助を受けたことを感謝している。

(取材 古田繁男)

韓国の民主回復を願う

合同祈禱会 八仙台 V

去る11月15日(土)、仙台元寺小路教会で韓国の民主回復のための祈禱会が、プロテスタントとカトリックの合同で行われた。

まず静かな奏楽のうちに、笹直直哉神父の司会でイザヤ書53章が朗読された。その後、祈りと賛美歌が続き、説教は、東北学院大学の浅見定雄氏により、「求めよ、そうすれば与えられる」との祈りについてイエスの語られたルカ18章を一節ずつ解説しながら、この

合同祈禱会の祈りを神が聞き入れて下さるよりにと訴えた。

当日の献金はすべて、この韓国問題に係わる仕事のためにささげられ、最後に、アシジの聖フランシスコの平和の祈りを全員で献げ、合同祈禱会を終了した。

タイ難民キャンプ体験報告会

八仙台・フィリピン研究会 V

去る12月7日(日)、元寺小路教会信徒館で、タイ難民キャンプでボランティア活動をしてきたドミニコ会のSr鈴木の報告会が行われた。

シスターは、カリタス・ジャバンのボランティアとして一度、そして続いて再度個人のボランティアとしてタイに渡り、難民キャンプで、主に子ども達の教育に携わってきた。

キャンプに収容されている子ども達は、筆舌に尽くせぬ苦しみ、体験を経て、カンボジアからのがれてきており、その体験をせつせと絵に描いたものをシスターが日本に持ち帰った。それらの絵はスライドにし、当日公開された。赤ん坊がボールのように地面に、木にたつきつけられ殺される光景、父母を子ども達の前で、くわえたばこで殺す役人の顔など、ボルボト政権の大虐殺がいかにひどいものだったかを証明するもので、参加者一同のショックは大きかった。そして、もっと多くの人達が、この絵を見てほしいとの願いをもって、日曜の午後の集会を閉じた。なお、Sr鈴木は、依頼があればいつでも応じると言っている。

一家庭に一冊

教皇歓迎パンフレットを



教皇来日を間近にひかえ、日本の司教団を中心に、その準備が着々と進められています。訪問先は、東京、長崎、広島ですが、日本の全教区民で迎えする事には変わりありません。

さて、ヨハネ・パウロ二世教皇をよく理解するための一端として、広報委員会から「教皇歓迎パンフレット」が発行されました。

教皇訪日のための経費は総額二億六百万円で、その金額をまかなうために、このパンフレットの売れ行きが注目されています。

パンフレットは、各国訪問の時の写真を中心に、日本のカトリック教会の歴史にも触れており、信者でない方々にとっても手ごろな紹介になるでしょう。

各家庭一冊はもとより、親類、知人へのプレゼントにしても喜ばれるでしょう。

教皇は、常に平和の使者、巡礼者として、各国を訪問しています。日本司教団でもその姿勢を保つ意味で、特殊グループからの寄付金の申し出を、すべて断っています。

日本のカトリック教会は、教皇を信徒の手でおむかえすることを基本姿勢としていますので、全教会で最大限の協力をするよう、努力したいものです。

難民のお友達のために

◇ 白河幼稚園で募金 ◇



毎年幼稚園祭の一環として、園児達一人一人が、ささやかな愛の運動を行っている。

今年「インドシナ難民のお友達のために」の目的で、幼稚園祭の一月前から、前にいただいた、かわいい貯金箱を利用して、自分のおこづかいの一部や、おもちゃ、お菓子など、がまんしたお金を毎日ためていた。

幼稚園祭(10月26日)の当日、ホールに展示された「イエズスさまと子どもたち」のはり絵(園児製作品)の前に貯金箱を置き、子ども達に募金を呼びかけた。翌日、貯金箱のお金を自分達で金種別に分け、その金額の多さに感嘆した。総額十二万三千九百五十円は、さっそく、カリタスジャパンに送られた。

田中澄江氏 講演会



去る12月1日午前10時から、米川聖マリア保育園ホールで、作家田中澄江氏の講演会が行われた。

米川には、二度目の来町で、すでに米川の人々とは顔なじみである。前回は、嫁と姑の問題など、身近な話で聴衆を魅了した。今回は「出会い」のすばらしい人生と題して、田中氏の深い人生経験と多くの貴重な出会いを通して得る喜びを語られ、聴衆

に深い感銘を与えた。

聴衆は、平日にもかかわらず約150名にも及び、公立小中学校の先生達もテープ持参で参加した。米川カトリック教会では、すでに田中氏の他に、三浦朱門、遠藤周作氏の講演会も行っており、町の文化の発展のために教会の果たす役割は多く、各方面から喜ばれている。

手工芸趣味の教室 展示会

△ 八戸・文化センター △



八戸塩町カトリック教会の隣りにある聖ウルスラ修道院では、「文化センター」という名称で、聖書研究、英会話、手芸、和裁などを開催している。それぞれの中で布教活動が行われているが、今回、指導者篠崎悦子修道女によって、手工芸趣味の教室「作品展示会」を11月1日〜3日まで八戸市の中心街カネイリビル七階催事場において開催され、三日間で千人の入場者を迎えた。四十数名の方の作品約二百点が展示され、即売も行われた。

旅行カバン・ハンドバック・壁時計・額絵、電気スタンドなどの革加工品、クッション・チョッキなどスエード作品、木目込み人形など。作品の中には、宗教的な図柄も数多くあり、中でも最高に人目を引いたのは、幅40センチ、高さ130センチの「七宝焼」で、七つの秘跡にあやかっ七つのブドウの房がデザインされたものであった。この「七宝焼」は、塩町教会が建築された時に、そのホールの一部を飾ることになった。

おらゝ
教会 (4)

元寺小路教会



創立百周年

「おらが教会」仙台教区司教座聖堂・元寺小路教会は、明治10年（一八七七年）に、プロトラン神父様が定住司祭として来仙され、元寺小路に家屋敷を購入して仮教会とされたのに始まる。以来百年を越えた。

昭和52年（一九七七年）には、教会開設百年を記念して、「宮城県カトリック教会百年のあゆみ記念事業委員会」を発足させ、宮城県下各教会の信者の方々の絶大な協力によって、百年記念PR看板設置、26聖人映画会、広瀬川殉教碑脇記念植樹、記念講演会（講師 土居健郎・小堀杏奴両氏）、記念式典、祝賀式、物故聖職者追悼ミサ、講演「ジャック神父様をしのんで」（講師・佐藤直助氏）、史料展示会、百年史編さん等の記念事業を予定した。

皆様の御協力によって、その年の内に予定事業の大部分を予想以上の成果で終えることができた。史料展示会、百年史編さんは未完であるが、遅れていた本冊分（本冊と別冊の

2巻になる予定）の原稿も整い、印刷屋に渡った。来春3月には、三百頁を越える大冊に刷りあがる予定である。また多くの方々から御提出いただいた貴重な写真等は、百年史出版を期して展示会を開き、御覧いただく事を予定している。以上、この機会に紙上を借りて、御協力下さった方々に御礼申し上げますと共に、報告させていただきます。

顔

「おらが教会」の現状は、主任司祭・土井文雄神父様の司牧のもとに信徒数一二六七名、教会は、仙台駅に近く、広瀬通りと東五番丁の交差点脇に位置している。かつては、聖堂の十字架、鐘楼が高くそびえていたが、今や十階に及ぶビルの谷間になってしまっている。教会構内の緑に囲まれた聖堂は、かえって都会のコンクリート・ブロックの中で目に安らぎを与えている。小鳥も、僅かな緑であつてもその緑を求めて渡ってきて、暫しの安らぎを得ているように見える。

教会が今当面している問題

当教会は、信者の数も多く、転入・転出も頻繁で、しかも交通至便のこともあつて、他教会の方でミサに与る方が少なくないため、信者相互が親しく接し、知り合うことが難しく、小教区の信者としてのまとまりが得にくいことである。特に信者の大部分がサラリーマン家庭で、壮年の集まりをよくすることが年来的の宿題になっている。「週休二日制」はこれからの教会生活に不可欠になっていることを感じさせられる。「都会におけるこれからの教会」の課題が提示されているといえよう。

主任神父様の横顔

この大きな教会を預かる定住の神父様は、ただお一人。土井神父様の司教総代理、その他教区の役職をお持ちの上、教会は司教座聖堂であるため、そのための行事もあり、信徒館は教会関係諸会合に頻繁に利用され、結婚式の申し込みも少なくない。そのお忙しさの中で、凡張面で行動的な、「おひげの神父様」土井神父様は、時にいららくに大笑されながら、大奮闘していられるが、「神父不足」が言われている状況の中で、新たな教会運営、そこでの信徒の役割について考える時が来ていることを如実に感じさせられる。

おわりに

聖堂の耐用年数があと20年なので、聖堂建設計画が進められている。司教座聖堂でもあるので、教区との相談は不可欠で、まだ基本設計を構想できるまでに進んでいないが、何はともあれ、多額の自己資金を持たねばならないと、バザー、廃品回収などによる資金蓄積に全教会をあげて努力している。

これらの問題の解決に不可欠なのは、内的生活の充実であることはいうまでもない。それには、昨年の四旬節教書で、司教様から努力するように呼びかけのあった「家庭における子供の信仰教育」を中心に、各会で具体的努力を進めることが確認されている。

（教会委員会委員長・岩下新太郎）



江角修道女と

仙台教区

昨年12月8日午後、長崎の浦上天堂で、長崎純心聖母会の創設者の江角（えずみ）ヤス修道女の葬儀ミサが行われた。松永久次郎長崎補佐司教主司式の共同ミサも、それにづく告別式もきわめて感動的で、80年の生涯を神の愛に捧げつくした江角さんにふさわしいものであった。実は、日本で最初の、日本人による修道会の創設者である江角さんは、子どもの仙台教区と深いかわりをもたれた方でもあった。島根県に生まれた彼女は、東京の女子高等師範学校を経て、当時唯一とつ女子に最高学府の門戸を開いていた東北（帝国）大学に入学。大正15年（一九二六年）に女性学士第一号として理学部数学科を卒業した。彼

岩手カトリック・センターでは、昨年「家庭における子供の信仰教育の手引」を制作中であるが、問答式によるその内容の一部を次に紹介したい。（質問） 幼児にとって、「祈り」とは何でしょうか。考える力もない子供が、本当に祈ることなどできるのでしょうか。（答え） 祈りとは、神の愛と慈しみに対して、私たちが答えていくことです。神はキリストの全生涯をもって、すなわちそのお言葉、行いをもって、私たちに愛を語りかけ、おはからいを示して下さいました。私達が幸せに生きることが神



たる育
いけ教
づお仰
基に信
に庭の
書家
聖子

教区目標

女のカトリックへの入信はこの大学時代であった。友人から借りた「イミタチオ・クリスチ」（キリストにならいて）を読んで、とか、日本二十六聖人のことを知って、とか入信の動機を語っている。洗礼は仙台の量屋町教会で佐藤直助先生らと一緒だったときいている。女性第一号理学士の江角先生が、その後さらに献身の道を進み、日本で最初の邦人女子修道会創設を志したについては、これまで日本人最初の司教で、仙台市出身の長崎教区長早坂久之助司教との出会いを述べなければならぬまい。このあたりは当時を知る方々に話しておいてもらわなければならないが、とにかく、これほど福音宣教に励まれ、かがやかしい業績を示された修道女が、その信仰の芽生えをわが仙台教区で培われたことに、深い感動を覚えるものである。

のお望みであり、神は、その御計画を実現なさいます。従って福音的祈りは、まづこのような愛と慈しみを示して下さい。父なる神に対する賛美と感謝でなければなりません。まだ言葉のわからない子供でも、親の祈る態度を見て「祈り」を感じ、言葉がわかるようになれば、親の祈りに合わせて子供らしい祈りができるようにするのはないでしょうか。大事なことは、神がいらっしゃることの喜びを体験させて、それに対する感謝の気持ちを起こさせることだと思えます。



年頭に当たり、教会の姿について、一考する事も意味のあることだと思えます。教会とは、何でしょうか。教会の存在理由は、どこにあるのでしょうか。

教会は、建物ではありません。キリスト者一人一人が教会です。各信者は、何人か集まって、まず各家庭を集会の場所にするでしょう。信者の数が増すにつれて、人々は教会堂を望むようになり、自分達の手で教会を建てる計画がなされるでしょう。このようにして人々は、教会の意味を自覚するので、毎週習い事のため遠くまで行く事を考えれば、一週一度のミサのために、遠い教会に行く事は、それ程負担になるでしょうか。教会の存在理由は、イエズス・キリストを人々に告げ知らせる事です。「教会は、まさに宣教するため存在しています。」（福音宣教14）キリストを知ることにより、人間は内部から変化させられ、新たにされ、イエズス・キリストの仕事の協力者になろうとするのです。洗礼を受けるのは、自分のためではありません。典礼も教会活動もすべて、社会のため、人々のために志向されるべきでしょう。教会は、その国の良心であるべきです。その点で、教会は日本の国の良心となっているでしょうか。難民、貧困、公害等の点で。常識的に生きる事は簡単です。しかしキリストに従おうとする時、あえて、非常識を生きななければならない事があるという事もまた知らなければなりません。（村首神父）

「聖グレゴリオの家」訪問と

高田三郎 講演会 (上)

(仙台) 教会音楽の集い

去る11月9日、東京・東久留米市に、最近開設された「聖グレゴリオの家」(宗教音楽研究所)を、教会音楽の集いから、3名で訪問しました。またその日に、典礼聖歌を作曲された高田三郎先生による「これからの典礼と音楽」ことばと聖歌」と題されるシンポジウムがあり、貴重な時間をおくることができました。

「聖グレゴリオの家」は、元は板橋教会のグレオン・ゴールドマン神父様と、当聖歌隊にいた音楽家でもある橋本周子先生らによって昨年(宗教音楽の教育機関は今年から)創立されました。準備には約10年の期間を要し、設立に数億を要したそうです。

設立動機の中心は、典礼憲章に、「教会音楽の中心的研究機関がつくられるべきである」と書き記されている事だそうです。

また、教会音楽の研究と教育機関としての他に、全国の典礼音楽奉仕者、聖歌隊や教会音楽団体の協力体制の中核としての役割があります。実際、ここに来て、東京あるいは東京近郊に、われわれの想像できない程のりっぱな、聖歌隊や教会音楽団体があることがわかりました。全国にも、多くの人々、団体が孤立したまま「眠っている」事が想像できます。この機関を通じて、是非、互いの連帯、意見の交流と向上をめざすべきものと思われれます。

おしらせ



● ババ様と祈る長崎巡礼の旅

△カトリック新聞主催▽

● 出発日 一九八一年二月下旬 3泊4日
参加費用 東京発5万9千円、

仙台発7万4千円、札幌発8万9千円

● ステジュール予定

- 一日目、仙台・札幌・東京発で空路長崎空港へ。到着後、キリシタンゆかりの地・島原へ。
- 二日目、長崎(教皇様と共に祈る長崎巡礼)
- 三日目、バスで外海へ。出津教会・ド・ロ記念館など)午後西海橋を経て平戸へ。着後、平戸市内巡礼(キリシタン資料館、天主堂、オランダ商館跡等)

高田三郎先生講演会について

この講演会は、グレゴリオの家の催しの一つである「シンポジウム」の第4回目として「ことばと聖歌」という主題で行われました。

高田先生は講演のはじめに、以前はプロテスタントで、38歳の時に受洗したこと、現在聖歌改定委員会に所属していることなど、自分の経歴をお話しになり、このときにはすでに会場全体になごやかな雰囲気を感じられました。このあと高田先生の講演、パネルディスカッション、フリートークキングと進んだわけですが、次月に、その内容を要約してみたいと思います。

(石田博幸、三谷尚)

四日目、平戸発福岡着。バスで唐津經由博多へ。夕刻空路、東京・仙台・札幌へそれぞれ帰路の予定である。

※団長神父様の同行、及び現地巡礼訪問先の手配はカトリック新聞社が責任を負います。

● 教皇訪日記念絵はがき等セット発売

教皇のご訪日を大人ばかりでなく、子どもたちにも知ってもらうために、記念品セットが発売されます。内容は次のとおりです。教皇大型カラー写真、絵はがき、記念メダル、下敷き、豆絵本(教皇ヨハネ・パウロ二世ものがたり)、ステッカー (頒価千円)

● 仙台・平和祈禱会

1月1日 午後2時より、聖公会にて。

● ターグング 茂庭荘にて

1月18日午後3時半~19日午前11時半

80年代の宣教「アジアの視点から考える」講師II元・女子学院院長・大島孝一氏 (会費6千円)

● 信仰一致祈禱週間合同礼拝

1月19日午後6時 元寺小路教会
1月25日午後6時 外記丁教会

【編集後記】

＊あけましておめでとうござります。皆様のお恵みに支えられて、今年もそれぞれの立場で、福音を宣べ伝える事にまい進したいものです。

仙台司教区事務所だより39号

昭和五十六年一月一日発行

発行所 仙台司教区事務所

980 仙台市本町一丁目2番12号

TEL 0222 22 3731